

古文  
物語

## 更級日記

竹芝寺 〈全三回〉

講師 畠山 俊

### 学習のねらい

- 【第一回】登場人物の行動と心情を正しく読み取り、内容を読み味わう。
- 【第二回】話の展開を正しくとらえ、登場人物たちがどのようなことに対して、どのような心情を持っていくのか読み取る。
- 【第三回】話の結末までを読み、武蔵の国の男と帝の娘がどのようになったのか読み取る。

### ■第一回 学習のポイント

学習の  
ポイント ①

#### 主人公の若者の経歴を読み取る

武蔵の国の竹芝に住んでいた男の話である。その男が朝廷の警護の役に指名されて、京都に上る。そこで自分の国の酒壺の様子を独り言でつぶやきながら、掃き掃除をしていた。

武蔵の国では酒を造って壺に入れ、いくつかずつまとめておいて置き、そこにひしゃく代わりのひょうたんが渡してあるというのである。この武蔵（現在の東京、埼玉、神奈川の一部）の男がこの話の主人公である。

#### \*注意する語

などや 「どうして」

ひょうたん 「ひょうたん」ここではひしゃく代わりに使っている。

見で 「見」はマ行上一段動詞の未然形。未然形に接続する「で」は「ないで」と現代語訳する。

独りごつ 「独り言を言う」

学習の  
ポイント ②

#### 主人公の若者と帝の娘とのかかわりを読む

主人公の若者が掃除しながら、つぶやいた言葉をたまたま帝の大切に育てられている娘が耳にする。警護の仕事をしている男と帝の娘とはふつうならまったくかかわりのないふたりであるが、ここでは帝の娘が男を見、つぶやきを聞くことがかかわりができたのである。

#### \*注意する語

かしづく 「大切に育てる」

御簾 「簾」は「すだれ」のこと。

ご覧ず 「見る」の敬語。サ行変格活用の複合動詞。

学習の  
ポイント ③

#### 帝の娘の心情を読み取る

掃除をしていた男の言葉は帝の娘の心にしみ、娘はその様子を自分の目で見たいと思った。そして、姿を見せ、男を近くまで呼び寄せた。

本来、直接話することなどできない関係だが、帝の娘の「知

りたい気持ち」が強いことが感じられる。

**\*注意する語**

あはれ 「心にしみる」 多くの訳語があるので、前後の文

脈に応じて訳を考える。

いかなる、いかに 共に疑問の語。

「どのような」「どのように」

ゆかし 「見たい、聞きたい、知りたい」

おぼす 「思ふ」の敬語。

かしこまりて 「つつしんだ様子で」

**第二回 学習のポイント**

**帝の娘に呼ばれた後の**

**男の行動を正確に読む**

**学習の  
ポイント 1**

帝の娘は男にもう一度独り言で言っていたことを聞かせなさい  
と言ひ、それを聞くと、その光景を実際に見たいから武蔵に連れ  
て行けと男に要求する。男は「運命」だと思つて、娘を背負つて  
武蔵に向かい、途中の橋を壊して、追っ手の足止めをする。京都  
から武蔵までを七日間で走り抜けるのである。

男は身分違いの女の要求にもすぐに決断して、従うことにする。  
また、大きな橋を渡ったところで、娘を背中からおろして引き返  
し、橋を壊すことも即座に考える。決断力と行動力のある男である。

**\*注意する語**

いまひとかへり 「もう一度」

仰す 「言ふ」の敬語。

かしこし、おそろし 共に「畏れ多い」

さるべきにやありけむ 「そうなる運命だろうか」

負ふ 「背負う」

こほつ 「壊す」

**\*敬語**

・尊敬語（仕手尊敬） 動作をする人に敬意を表す。

「思す」「仰す」「給ふ」

・謙讓語（受け手尊敬） 動作を受ける人に敬意を表す。

「申す」「奉る」

**上二段活用動詞の活用表（カ行）**

起く	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
お	お	お	き	き	く	くる	くれ	きよ

**学習の  
ポイント 2**

**娘の両親の行動と心情を読み取る**

娘の両親である帝と后は娘がいなくなったと聞いて、探し求め  
る。ある者が武蔵の国の男がいい香りのものを首にひっかけて飛  
ぶように去ったと言う。探したが、その男はいないので、武蔵の  
国に使いを派遣する。

ところが、途中の橋が壊されていて先に進めない。両親は娘を

探し、すぐに使いを送るなど、心配して思い惑っている様子がかがえる。

学習のポイント 3

男の知恵がどのように書かれているか読む

娘の両親の追跡にもかかわらず、男の知恵は一步先をいついて、うまく追っ手を足止めすることに成功する。背負った娘をうまく着物などで隠す、橋を壊すといった知恵が効果を発揮しているのである。

第三回 学習のポイント

学習のポイント 1

武蔵の国での男と娘の様子を読み取る

使いが武蔵に到着したのは三か月後。娘は使いに自分が男にここに連れてくることを命じたうえに、ここに住みよいことを告げる。男が捕まると困るし、ここに来たのは運命だとも言おう。そしてそれを朝廷に報告するように求める。

\*注意する語

おぼゆ 「思われる」ヤ行下二段動詞。

罪し 「罪に問われ」サ行変格活用 of 複合動詞、連用形。

掠ぜ 「ひどい目に合わす」サ行変格活用複合動詞、未然形。

宿世 「宿命、運命」

よし 「話のおおまかな内容」  
奏す 「言ふ」の謙讓語。話す対象は天皇、上皇に限られる特殊な敬語。

学習のポイント 2

娘の心情を読み味わう

帝の娘は「さるべきにやありけむ」と武蔵の国に来たことが「そうなる運命だった、運命付けられたことだった」と説明する。また、「宿世」という言葉も使っている。

これらの言葉には自分ではどうすることもできない、天によって決められた従わざるを得ないことだというニュアンスが感じられる。この娘は自らの意思で武蔵に留まりたいと主張したのである。

学習のポイント 3

帝の考えと二人のその後を知る

追っ手の使いは娘の言葉を聞くや、都に戻り、そのままを帝に告げる。帝ももう娘は連れ戻せないと悟る。そこで帝はその男と娘に武蔵の国を預け与え、さらに男にはもう朝廷の仕事を免除するよう命令を発する。

男は立派な家を建て、娘を住ませ、娘の死後、そこを寺にする。また、子どもたちは「武蔵」という姓を得て、おそらく代々そこを治めることになった。しかし警護の役はその後、女性の役になった。帝は娘のことを考え、できる限りの援助をする。そしてそれにこたえて、二人は幸せになり、子孫も繁栄したようだ。男の知恵と女性の意思の力がそれらの結果と結びついたのである。

娘を二度ととられないよう警護の役を女性にしたとユーモラスにまとめている。

\* 注意する語

言ふかひなし 「言ってもどうにもならない」

おほやけ事 「朝廷が課す労役」

よしの 「という内容の」

宣旨 「天皇の命令」

\* 古文動詞の九つの活用

・ 四段 ・ 上一段 ・ 上二段 ・ 下一段 ・ 下二段

・ カ変 ・ サ変 ・ ナ変 ・ ラ変

Vertical dashed lines for writing notes.

Vertical dashed lines for writing notes.

更級日記

竹芝寺

菅原孝標女

作者は、父の任国であった上総の国に下っていたが、十三歳の時、父の任期が終わり、上京することとなった。一行は武蔵の国の竹芝の地にさしかかり、そこでその地に残る古い伝承を聞いた。

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。国の人ありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」と、独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧するに、この男のかく独りごつを、いとあはれに、いかなるひさごのいかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾を押し上げて、「あの男、こち寄れ。」と召しければ、かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」

現代語訳

この話は、昔竹芝といった坂の話である。武蔵の国の人でそこに住んでいた人を、宮中の火焚屋の火を焚いて警護する衛士に任命して朝廷に差し上げたところ、宮中の庭を掃き掃除するといつて、「どうしてこのような苦しい目に合うのだろうか。私の国に七つ三つと酒を着くつてかたまつて置いてある酒壺に、差し渡してあるまっすぐな柄のひょうたんのひしゃくが、南風が吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、西風が吹くと東になびき、東風が吹くと西になびくを見ないで、このように掃除していることよ。」と、独り言を言つて、つぶやいたのを、その時、帝の娘でたいそう大切に育てられていらつした方が、たったひとり御簾のところまで出ていらつして、柱によりかかつて庭をご覧になっていたところ、この衛士の男がこのように独り言を言ったのを、たいへん心にしみて、どのようなひょうたんが、どのようにになびくのだろうと、とても知りたいと思われたので、御簾を押し上げて、「その衛士の男よ、こちらに来なさい。」と呼び寄せたので、衛士の男はつつしんだ様子で高欄の下まで歩み寄つたので、「言っていたことを、もう一度私に言つて聞かせなさい。」とおっしゃられたので、酒壺のことを、もう一度申し

と仰せられければ、酒壺のことを、いま一かへり申しければ、「我率て  
行きて見せよ。さ言ふやうあり。」と仰せられければ、かしこくおそろ  
しと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、論なく人  
追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、この宮を据ゑ奉り  
て、勢多の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越えて、この宮をかき  
負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

帝、后、皇女失せ給ひぬとおほしまどひ、求め給ふに、「武蔵の国の  
衛士の男なむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。」  
と申し出でて、この男を尋ぬるになかりけり。論なくもとの国にこそ行  
くらめと、おほやけより使下りて追ふに、勢多の橋こほれて、え行き  
やらず。三月といふに武蔵の国に行き着きて、この男を尋ぬるに、この  
皇女おほやけ使を召して、「我さるべきにやありけむ、この男の家ゆか  
しくて、率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおほ  
ゆ。この男罪し掠ぜられれば、我はいかであれと。これも前の世にこの  
国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。はや帰りておほやけにこのよしを  
奏せよ。」と仰せられければ、言はむ方なくて、上りて、帝に、かくな  
むありつると奏しければ、「言ふかひなし。その男を罪しても、今はこ  
の宮を取り返し、都に返し奉るべきにもあらず。竹芝の男に、生けらむ  
世のかぎり、武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせじ。ただ、

上げたところ、「私をそこに連れて行ってその様子を見せなさい。  
そのように言う理由があるのです。」とおっしゃられたので、恐  
れ多いことだとは衛士の男は思つたけれども、そうなる運命で  
あったのだろうか、帝の娘を背負い申し上げて京都から逃げ出し  
たが、言うまでもなく、使いが追つて来るだろうと思つて、その夜、  
勢多の橋のもとに、この宮をおろして座らせ申し上げて、自分  
は戻つて勢多の橋を橋脚と橋脚の間ひとつ分を壊して、その壊し  
た部分を飛び越えて、おろしたこの宮をふたたび背負い申し上げ  
て、出発して七日七夜という時に、武蔵の国に行き着いた。

帝と后は、娘の皇女がいなくなれたと思ひ悩まれて、探さ  
れたところ、「武蔵の国の衛士の男が、たいそう香りのいい物を  
首にひっかけて飛ぶやうに逃げていった。」とある人が申し出て、  
この衛士の男を探したところいなかつた。言うまでもなくこの衛  
士の男は出てきた元の国に行つたのだらうと、朝廷から追つ手の  
使いが京都を出発して追つていくが、勢多の橋が壊れていて、進  
むことができない。三か月という時になつてやつと武蔵の国に行  
き着いて、この衛士だった男を探したところ、この皇女がその  
朝廷の使いを呼び寄せて、「私はこうなる運命だったのだろうか、  
この男の家が見たくなって、連れて行けと私が言ったのでこの男  
は私をここへ連れてきたのである。たいへんこの土地は住みよく  
思われる。もしこの男が罪に問われひどい目にあわせられるなら  
ば、私はどうなれというのか。これも先の世でこの武蔵の国に都  
から移り住まなければならぬ宿命があつたのだらう。早く京都  
に帰つて朝廷にこのことをお伝え申し上げてください。」とおつ  
しやられたので、追つ手は何も言えなくて、京都に上つて、帝に、  
これこれこういうことでしたと申し上げたところ、「どうしよう  
もない。その男を罪に問うても、今となつてはこの宮を取り返し、  
都にお戻し申し上げることはできない。その竹芝の男に、生きて  
いるかぎりは、武蔵の国を預け取らせて、朝廷が課すさまじまな  
こともさせないことしよう。ただ、宮にその国を預け取らせ申

宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よしの宣旨<sup>せんじ</sup>下りにければ、この家を内裏<sup>り</sup>のごとく造りて住ませ奉りける家を、宮など失<sup>う</sup>せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵<sup>むさし</sup>といふ姓<sup>せい</sup>を得てなむありける。それより後<sup>のち</sup>、火焚屋に女は居るなり。

し上げよう。」という内容の天皇の命令が下ったので、男は自分の家を京都にある天皇の住まいのように立派に造って宮を住ませ申し上げていた家を、宮がお亡くなりになったので、寺にしたのを、竹芝寺というのである。その宮のお生みになった子どもは、そのまま武蔵という姓を手に入れた。この件の後、火焚屋には女性が居るのである。